

「教会内の問題の解決」

使徒 6 : 1～7

1. はじめに

- (1) 悪魔は、教会を破壊しようとして攻撃する。
 - ①外からの攻撃
 - ②それが不発に終わると、内部から崩壊を起そうとする。
 - ③最初の教会内部の問題は、アナニヤとサツピラの罪であった。
 - ④この箇所は、第 2 の教会内部の問題である。
 - ⑤この問題を乗り越えたと、さらに教会は成長する。
- (2) 問題解決のために、食卓のことに仕える人が 7 人選ばれる。
 - ①その中で最も重要なのは、ステパノである。
 - ②ステパノは、使徒の働きの物語の岐路に立つ人物である。
 - ③物語の主役は、ペテロからパウロに移行して行く。
 - ④宣教地は、イスラエルの地から地の果てに移行して行く。
 - ⑤その移行のきっかけとなる人物が、ステパノである。

2. アウトライン

- (1) 問題の勃発（1 節）
- (2) 使徒たちの提案（2～4 節）
- (3) 7 人の選抜（5～7 節）

結論：

- (1) ステパノ
- (2) ピリポ
- (3) アンテオケの改宗者ニコラオ
- (4) ヘレニストのユダヤ人

内部の問題にどのように対処すべきかについて学ぶ。

I. 問題の勃発（1 節）

1. 1 節

Act 6:1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。

(1) この問題は、祝福の結果生まれてきたものである。

①教会は成長している。

②信者たちは、愛の実践として相互扶助を行っている。

③人数が増えると、教会内に派閥が生まれる。

＊ギリシア語を使うユダヤ人たち（ヘレニスト）

＊ヘブル語を使うユダヤ人たち（ヘブライスト）

④使用する言語の違いは、文化的背景の違いである。

＊ローマの支配下では、ある程度ギリシア語ができないと成功しない。

＊ヘレニストのユダヤ人たちにとっては、ギリシア語は母国語である。

(2) ギリシア語を使うユダヤ人たちは、どういう人たちか。

①ディアスポラの地からイスラエルの地に帰還したユダヤ人たちである。

＊長期にわたって（ある場合は数世代にわたって）、離散の地に住んでいた。

＊彼らは、離散の地から帰還し、今はエルサレムに住んでいる。

＊ペンテコステの日以降、そのままエルサレムに留まった人もいただろう。

②彼らは、土着のユダヤ人（ヘブライスト）とは文化的背景が異なる。

＊ギリシア語で礼拝を行うシナゴグに通っていた。

＊一般論として、当時のユダヤ教やユダヤ文化はギリシア化の傾向にあった。

＊ヘレニストたちは、よりギリシア文明を受け入れていた。

③両者の違いは、さまざまな形を取って現れていた（緊張関係があった）。

＊教育、人生観、世界観、芸術や哲学に対する興味

(3) ヘレニストの中にやもめが多かった理由は何か。

①晩年になってイスラエルの地に帰還するディアスポラのユダヤ人が多くいた。

②エルサレムに埋葬されるためである。

＊ユダヤ人たちは、聖都に埋葬された人が最初に復活すると考えていた。

＊離散の地に埋葬された人は、先ず聖都に埋葬されてから復活するとされた。

＊この習慣の名残が、今もユダヤ人の間にある。

・イスラエルの地の土を小袋に入れ、遺体とともに埋葬する。

③教会は、大勢のヘレニストのやもめの面倒を見ることになった。

(4) 律法と預言者の教え

①やもめや必要を抱えた人たちは、信仰の共同体が援助する。

②申 10：17～19

Deu 10:17 あなたがたの神、【主】は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かた

よって愛することなく、わいろを取らず、

Deu 10:18 みなしごや、やもめのためにさばきを行い、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。

Deu 10:19 あなたがたは在留異国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったからである。

③エレ 7 : 5～7

Jer 7:5 もし、ほんとうに、あなたがたが行いとわざとを改め、あなたがたの間で公義を行い、

Jer 7:6 在留異国人、みなしご、やもめをしいたげず、罪のない者の血をこの所で流さず、ほかの神々に従って自分の身にわざわいを招くようなことをしなければ、

Jer 7:7 わたしはこの所、わたしがあなたがたの先祖に与えたこの地に、とこしえからとこしえまで、あなたがたを住ませよう。

④初期の教会は、この命令を実行していた。

*やもめたちに毎日食事を配給していた。

⑤にもかかわらず、ヘレニストたちは自分たちがなおざりにされていると感じた。

*毎日の配給で、ヘブライストに対してえこひいきが行われていると感じた。

*意図的にえこひいきをしていたわけではないだろう。

II. 使徒たちの提案 (2～4 節)

1. 2 節

Act 6:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。

(1) 12 使徒の対応

①迅速に対応した。

②信者総会を開いた。

③問題があることを率直に認めた。

④奉仕の原則を明らかにした。

*霊的な奉仕が優先される。

*物質的奉仕も尊いものである。

2. 3～4 節

Act 6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。

Act 6:4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」

(1) 「食卓のことに仕える」ために7人が選ばれた。

①食物を配給するという愛の奉仕をこの7人が行うように、権限委譲がなされた。

＊教会の金銭的管理と運用は、この7人に委ねられた。

②使徒たちは、「もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにする」。

＊祈りは、人について神に伝えること。

＊みことばの奉仕は、神について人に伝えること。

(2) この7人は執事職の始まりとなったと思われるが、断定はできない。

①ギリシア語の「ディアコノス」（執事）（deacon）という言葉は出ていない。

②しかし、動詞の「ディアコネオウ」（仕える）は出ている。

③一時的な職責であった可能性もある。

(3) 3つの条件

①評判が良い（人をつまずかせないために必要）。

②御霊に満ちている（霊的資質が必要）。

③知恵に満ちている（実際的な能力が必要）。

(4) 申1:12～13

Deu 1:12 どのようにして、私一人であなたがたのもめごとと重荷と争いを負いきれるだろうか。

Deu 1:13 あなたがたは部族ごとに、知恵があり判断力があり経験に富む人たちを出しなさい。彼らをあなたがたのかしらとして立てよう。」

①モーセは、民が自らのかしらを選ぶことを許可した。

②ここでも、信者たちは自らの判断で7人を選ぶことが許された。

③ここでは、クジを引いていない。

④内住の聖霊の導きに信頼した。

Ⅲ. 7人の選抜（5～7節）

1. 5～6節

Act 6:5 この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、

Act 6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。

(1) 7人の顔ぶれ

①全員が、ギリシア名を持っている。

*全員が、ヘレニストのユダヤ人であろう。

*これは、愛ある譲歩であり、知恵である。

*特記すべき人物が3名いる。

・ステパノ、ピリポ、アンテオケの改宗者ニコラオ

*他の4人に関しては、情報がない。

(2) 祈りと按手

①使徒たちは、7人のために祈り、彼らの上に手を置いた。

②これは、使徒たちから権限を委譲されたという公の宣言である。

③彼らは、使徒たちの代理人となった。

④手を置くことは、ユダヤの習慣である。

⑤民 27 : 22～23

Num 27:22 モーセは【主】が命じられたとおりに行った。ヨシュアを連れて来て、彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、

Num 27:23 自分の手を彼の上に置いて、【主】がモーセを通して告げられたとおりに任命した。

⑥現代のラビも、同じ方法で任職を受ける。

2. 7節

Act 6:7 こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った。

(1) 2度目の教会成長報告

①使 2 : 47 が 1 回目である。

Act 2:47 神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにくださった。

②使 6 : 7 が 2 回目である。

*教会内の問題が解決した結果の、教会成長である。

(2) 「多くの祭司たちが次々に信仰に入った」

①エルサレムで弟子の数が非常に増えて行った。

②入信する祭司たちへの言及がある。

③彼らは、サドカイ派である。

④7章に入ると、ステパノが糾弾されるが、ルカはその準備をしている。

*糾弾の内容が正しければ、多くの祭司たちが入信することはあり得ない。

結論：人はより良い方法を求める。神はより良い人を求める。

1. ステパノ

(1) 信仰と聖霊に満ちた人

①信仰は聖霊に満たされるための前提条件である。

②聖霊によって人格が支配されていた。

(2) 彼は、エルサレム教会で重要な役割を演じるようになる。

①彼は使徒ではないが、最初の殉教者となる。

②彼の死がきっかけとなり、迫害が起こる。

③信者は散らされ、宣教地はエルサレムから外に広がって行く。

2. ピリポ

(1) サマリヤ人伝道行こうようになる。

(2) エチオピア人の宦官を救いに導く。

(3) カイザリヤでパウロをもてなす。

3. アンテオケの改宗者ニコラオ

(1) 彼は、イエスを信じる前にユダヤ教に改宗していた。

(2) アンテオケという町とユダヤ教への改宗者は、これから先、ルカが記す物語の重要な要素となって行く。

①アンテオケの教会が異邦人教会として成長し、世界宣教を行うようになる。

②改宗者は、パウロの伝道に積極的に応答した人たちである。

③使 13 : 43

Act 13:43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。

4. ヘレニストのユダヤ人たち

(1) ヘレニストのユダヤ人たちが、宣教の広がりのために用いられた。

(2) 世界宣教の文脈

①日々の配給への不満→②7人の選び（全員ヘレニスト）→③ステパノの登場→

④ステパノの殉教→⑤迫害→⑥ヘレニストのユダヤ人のエルサレム脱出→

⑦ピリポのサマリヤ人伝道→⑧アンテオケでの異邦人伝道（使 11 : 19～20）→

⑨異邦人教会の確立→⑩パウロの登場→⑪世界宣教

(3) すべての信者になんらかの役割が与えられている。

「ステパノの逮捕」

使徒6:8～15

1. はじめに

(1) 問題解決のために、食卓のことに仕える人が7人選ばれた。

- ①その中で最も重要なのは、ステパノである。
- ②ステパノは、使徒の働きの物語の岐路に立つ人物である。
- ③物語の主演は、ペテロからパウロに移行して行く。
- ④宣教地は、イスラエルの地から地の果てに移行して行く。
- ⑤その移行のきっかけとなる人物が、ステパノである。

(2) 使6章と7章の流れ

- ①ステパノの逮捕
 - ②ステパノの弁明
 - ③ステパノの殉教者の死
- *最後に、パウロが登場する。

2. アウトライン

- (1) ステパノの奉仕 (8～10 節)
- (2) ステパノの逮捕 (11～12 節)
- (3) ステパノを訴える偽証人たち (13～15 節)

結論：神殿から会堂（シナゴグ）へ

ステパノの逮捕について学ぶ。

I. ステパノの奉仕 (8～10 節)

1. 8 節

Act 6:8 さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていた。

(1) ステパノの本来の賜物は、伝道者のそれである

- ①彼は、「恵みと力とに満ち」て奉仕をしていた。

(2) 彼の働きは、使徒たちのそれに非常に似ている。

- ①「人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていた」
- ②不思議なわざとしるしは、使徒たちの権威と信頼性を証明するものである。

③使徒たち以外に、不思議としるしを行っていた伝道者が例外的に2人いた。

＊ステパノとピリポ

Act 8:6 群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。

④この2人は、使徒たちの按手によってこの賜物を得たと思われる。

(3) ステパノは、数々のヘレニストのシナゴグを訪問し、伝道を行った。

①ナザレのイエスは、主であり救い主であるというメッセージを語った。

②当時、エルサレムを中心に480の会堂（シナゴグ）があったと言われている。

③同じ文化的背景のユダヤ人たちが集まり、各会堂を形成していた。

④そのひとつが、リベルテンの会堂である。ステパノは、そこで福音を伝えた。

2. 9節

Act 6:9 ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジヤから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。

(1) リベルテンの会堂（リベルティノス）

①かつてローマの奴隷であったが、今は自由民となったユダヤ人たち

②親は奴隷であったが、子どもは自由民となったユダヤ人たち

③この会堂の献堂の碑文が発掘されている。

(2) この会堂には、4つのサブグループに細分化されていた。

①クレネ人

＊リビアからの帰還民

②アレキサンドリヤ人

＊エジプトからの帰還民

③キリキヤから来た人々

＊サウロの出身地タルソは、キリキヤに含まれる。

＊サウロがこの会堂のキリキヤ人グループに属していた可能性はある。

＊ステパノとサウロが神学論争をした可能性もある。

④アジアから来た人々

＊小アジアのさまざまな地区から帰還したユダヤ人たち

(3) ステパノは、リベルテンの会堂の4つのグループと議論した。

3. 10節

Act 6:10 しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。

(1) ステパノの役割と賜物

①7 人の世話役のひとり

②しるしを行う人

③伝道者

④すぐれた討論者

＊「恵みと力とに満ち」（8 節）

＊「知恵と御霊によって語っていた」（10 節）

(2) ユダヤ人たちは、ステパノに対抗することができなかった。

①理屈で対抗できない場合は、人は力に訴える。

Ⅱ. ステパノの逮捕（11～12 節）

1. 11 節

Act 6:11 そこで、彼らはある人々をそそのかし、「私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた」と言わせた。

(1) 「彼らはある人々をそそのかし、」

①脅迫か買収により、偽証する人々を立てた。

②ユダヤ教では、偽証は死罪に値する。

(2) 「私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた」

①これが偽証の内容である。

②彼らは、ステパノを冒瀆罪で追求したのである。

③ミシュナによれば、本来冒瀆罪とは「ヤハウエという神の契約の御名をみだりに口にすること」である。

④紀元 1 世紀になると、冒瀆罪のより広い解釈が行われていた可能性がある。

2. 12 節

Act 6:12 また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。

(1) 偽証人の言葉を聞いただけで、民衆と長老たちと律法学者たちは激怒した。

①彼らは徒党を組んでステパノを襲い、彼をサンヘドリンの前に立たせた。

②使徒たちは、イエスの御名で語ることを禁じられていた。

(2) イエスの弟子たちがサンヘドリンの前に立つ出来事が 4 度起こる。

- ①ペテロとヨハネ（4：15）
- ②使徒たち全員（5：27）
- ③ステパノ（6：12）
- ④パウロ（22：30）

Ⅲ. ステパノを訴える偽証人たち（13～15 節）

1. 13 節

Act 6:13 そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。」

(1) 偽証人たちの糾弾内容は、後に出て来るステパノの弁明からある程度類推される。

- ①使徒たちが語った死者の復活のメッセージは、サドカイ派を激怒させた。
- ②律法は無効になったというステパノのメッセージは、パリサイ派を激怒させた。
- ③ステパノのメッセージは、ヘブル人への手紙の論旨と似たものである。
 - *メシアの死と復活により、新しい契約の時代に入った。
 - *御子イエスは、ユダヤ教のあらゆる人物や制度よりも優位に立つ。
 - *メシアの死により、モーセの律法は無効になった。
- ④以上の論旨は、モーセや神殿に逆らうものではなく、正しい解釈である。

(2) ステパノを糾弾する理由は、彼がユダヤ教の土台を攻撃しているからである。

- ①神、②モーセ、③トーラー、④神殿

(3) 彼がユダヤ教の土台を攻撃しているという証言は、ユダヤ人を激怒させた。

- ①モーセに対する冒瀆（11 節）
 - *すべてのユダヤ人を激怒させた。
- ②神に対する冒瀆（11 節）
 - *すべてのユダヤ人を激怒させた。
- ③神殿に対する攻撃（13～14 節）
 - *サドカイ人を激怒させた。
- ④律法（トーラー）に対する攻撃（13～14 節）
 - *パリサイ人を激怒させた。

(4) 当時のユダヤ人社会には、政教分離という概念がなかった。

- ①ユダヤ教はそのまま政治であり文化であった。
- ②ユダヤ教を否定するステパノは、愛国心に欠けると見なされた。

2. 14 節

Act 6:14 『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

- (1) イエス自身が、ご自身は神殿よりも偉大だと語っておられた。

Mat 12:6 あなたがたに言いますが、ここに宮より大きな者がいるのです。

- (2) またイエスは、神殿の崩壊を預言しておられた。

Luk 21:6 「あなたがたのしているこれらの物について言えば、石がくずされずに積まれたまま残ることのない日がやって来ます。」

- ①恐らくステパノは、神殿の崩壊についても語ったことであろう。

- (3) イエスの裁判では、イエスのことばが文脈を無視して引用された。

Mar 14:58 「私たちは、この人が『わたしは手で造られたこの神殿をこわして、三日のうちに、手で造られない別の神殿を造ってみせる』と言うのを聞きました。」

- ①イエスがステパノの見本となっている。

3. 15 節

Act 6:15 議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。

- (1) 全員出席していたとするなら、71人の議員がいたことになる。

- ①彼らはステパノを見つめ、どういう弁明がなされるか、待った。

- (2) 「すると彼の顔は御使いの顔のように見えた」

- ①シナイ山で、モーセの顔は、神との出会いを反映させて輝いた。

Exo 34:29 それから、モーセはシナイ山から降りて来た。モーセが山を降りて来たとき、その手に二枚のあかしの石の板を持っていた。彼は、主と話したので自分の顔のはだが光を放ったのを知らなかった。

Exo 34:35 イスラエル人はモーセの顔を見た。まことに、モーセの顔のはだは光を放った。モーセは、主と話すために入っていくまで、自分の顔におおいを掛けていた。

結論：神殿から会堂（シナゴグ）へ

1. ステパノは使徒の働きのターニングポイントに立つ人物

- (1) ペテロからパウロへ
- (2) イスラエルの地から地の果てへ
- (3) 神殿から会堂（シナゴグ）へ

2. シナゴグの歴史

- (1) シナゴグは、最初はユダヤ人の集まりを意味した。
 - ①それが時間の経過とともに、集まる場所を意味するようになった。
 - ②「教会」も同じような経緯を辿る。
- (2) バビロン捕囚（前 586 年）の期間に誕生したと思われる。
 - ①神殿崩壊後も、ユダヤ教を維持するための方法として生まれた。
 - ②シナゴグは、祈りとトーラーの学びのためのコミュニティセンターとなった。
- (3) 捕囚からの帰還後
 - ①イスラエルの地に帰還したユダヤ人たちは、各地にシナゴグを建てた。
 - ②ディアスポラの地に留まったユダヤ人たちは、シナゴグの活動を続けた。
 - ③両者にとって、シナゴグは神殿での礼拝を補完するものとなった。
- (3) 紀元 1 世紀
 - ①イスラエルの地には 480 のシナゴグがあったとされる。
 - ②それぞれのシナゴグが、文化的均一性を保持した。
(ILL) 難破した 2 人のユダヤ人のたとえ話 (3 つのシナゴグ)
 - ③シナゴグは、その地におけるユダヤ人の生活の中心となった。
 - *イスラエルの地においても、ディアスポラの地においても、そう言える。
 - *コミュニティセンター
 - *礼拝、祈り、説教の場
 - *冠婚葬祭の場
 - *時事問題を論じる場
 - *学校（成人学校、子どものための学校、改宗者のための学校）
 - ④シナゴグは、水辺の近くに建てられた。洗礼槽のための水。
- (4) 使徒の働きの中のシナゴグ
 - ①シナゴグという言葉は、19 回出て来る。
 - ②ユダヤ人の生活と密接に結びついていた。
 - ③パウロの伝道旅行のためのインフラストラクチャーとなった。
 - ④ディアスポラの地では、シナゴグのそばに宿屋が建てられることが多かった。

「ステパノの弁明（1）」

使徒7：1～16

1. はじめに

(1) ステパノは、使徒の働き物語の岐路に立つ人物である。

①ステパノの裁判が始まる。

②偽証人たちは、ステパノがユダヤ教の4つの土台を冒涇していると攻撃した。

＊神、モーセ、トラー、神殿

(2) イエスの裁判とステパノの裁判の類似点と相違点

①類似点

＊出席しているメンバーは、ほぼ同じ。特に、大祭司カヤパ。

＊訴因もほぼ同じである。

②相違点

＊イエスの場合は、答えないで沈黙された。

＊イザ 53：7の成就

Isa 53:7 彼は痛めつけられた。／彼は苦しんだが、口を開かない。／ほふり場に引かれて行く羊のように、／毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、／彼は口を開かない。

＊ステパノは、雄弁に語った。

＊弁明の内容は、糾弾されている点についての直接的反論ではない。

＊むしろ彼は、攻撃をしかけている。

＊その結果、彼は殉教の死を遂げることになる。

(3) ステパノの弁明

①この弁明は、使徒の働きの中で最も長いメッセージである。

②この弁明は、歴史的事実の羅列ではなく、旧約聖書の組織神学である。

＊ペテロやパウロは、旧約聖書を用いて福音を語った。

＊ステパノの弁明には、福音そのものは出てこない。

＊ステパノは、旧約聖書の内容を論じた。

③彼は、福音の普遍性は旧約聖書に根ざしていることを論証しようとした。

(4) ステパノの弁明の6つのポイント（7：1～53）

①アブラハム：ユダヤ教の土台（7：1～8）

②ヨセフ：拒否された者が高く上げられ救い主になった（7：9～16）。

③モーセ：拒否された者が解放者になった（7：17～40）。

- ④イスラエルの慢性的罪：偶像礼拝（7：41～43）
- ⑤神殿：神の臨在の普遍性（7：44～50）
- ⑥イスラエルの民の糾弾：常に聖霊に逆らっている（7：51～53）。

2. アウトライン

- (1) アブラハム：ユダヤ教の土台（7：1～8）
- (2) ヨセフ：拒否された者が高く上げられ救い主になった（7：9～16）。

結論：

- (1) アブラハムの物語の適用
- (2) ヨセフの物語の適用

ステパノの弁明について学ぶ。

I. アブラハム：ユダヤ教の土台（7：1～8）

1. 1節

Act 7:1 大祭司は、「そのとおりか」と尋ねた。

- (1) 大祭司は、ユダヤの律法に基づいて、被告に弁明の機会を与えた。
 - ①「そのとおりか」
 - ②偽証人たちは、ステパノが神、モーセ、トーラー、神殿を冒涇していると証言した。
 - ③この時のステパノの顔は、天使の顔のようであった。

2. 2～3節

Act 7:2 そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、

Act 7:3 『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。

- (1) 「兄弟たち、父たちよ。聞いてください」
 - ①「兄弟たち」とは、親愛の情を込めた温かい呼びかけである。
 - ②「父たち」とは、サンヘドリンの議員たちに対する尊敬の呼びかけである。
 - ③親愛と尊敬の情は、次第に糾弾の思いに変わって行く。

(2) ステパノの弁明のゴール

- ①トーラーや神殿は、重要ではあるが、ユダヤ教の神髄ではない。
 - *それらのものは、ユダヤ教の土台が据えられて以降に付加された。

- ②ユダヤ教の神髄とは、神の民に対する神の愛であり、守りの計画である。
- ③神に愛されている民は、一貫して父の計画を認識することに失敗してきた。

(3) 最初の事例として、アブラハムが取り上げられる。

- ①「私たちの父アブラハム」は、ユダヤ教の式文に出て来る慣用句である。
- ②ユダヤ民族の父であるアブラハムに焦点が合わさる。
- ③と同時に、ユダヤ民族の究極的な父である神の行動にも焦点が合わさる。
- ④神は、アブラハムを召した（創11：31～12：3）。

＊当時のアブラハムは、異邦人であった。

＊彼は、メソポタミアに住んでいた。

3. 4～5 節

Act 7:4 そこで、アブラハムはカルデヤ人の地を出て、ハランに住みました。そして、父の死後、神は彼をそこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、

Act 7:5 ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。それでも、子どももなかった彼に対して、この地を彼とその子孫に財産として与えることを約束されたのです。

(1) アブラハムの移動

- ①カルデヤ人の地からハランへ
- ②父の死後、ハランから約束の地へ

(2) 神はアブラハムに、土地を与えると約束された。

- ①当時、アブラハム是一片の土地も所有していなかった。
＊墓地でさえも購入する必要があった。
- ②また彼には、子どもがいなかった。
＊神は、彼の子孫が約束の地を所有するようになると約束された。

4. 6～7 節

Act 7:6 また神は次のようなことを話されました。『彼の子孫は外国に移り住み、四百年間、奴隷にされ、虐待される。』

Act 7:7 そして、こう言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしがさばく。その後、彼らはのがれ出て、この所で、わたしを礼拝する。』

(1) 彼の子孫は、土地を所有する前に、外国で奴隷となり、虐待される。

- ①奴隷状態が400年間続く。

(2) しかし神は、アブラハムの子孫を奴隷にした国を裁かれる。

①彼の子孫は、その国を逃れ、約束の地で神を礼拝するようになる。

5. 8 節

Act 7:8 また神は、アブラハムに割礼の契約をお与えになりました。こうして、彼にイサクが生まれました。彼は八日目にイサクに割礼を施しました。それから、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブに十二人の族長が生まれました。

(1) 神は、アブラハム契約の約束を必ず成就することを割礼によって確認された。

①トーラーや神殿ではなく、割礼（アブラハム契約）がユダヤ教の土台である。

(2) アブラハムから、イサク、ヤコブ、12人の族長が生まれた。

①ステパノは、イサクとヤコブを飛ばして、曾孫のヨセフに飛ぶ。

Ⅱ. ヨセフ：拒否された者が高く上げられ救い主になった（7：9～16）

1. 9～10 節

Act 7:9 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかし、神は彼とともにおられ、

Act 7:10 あらゆる患難から彼を救い出し、エジプト王パロの前で、恵みと知恵をお与えになったので、パロは彼をエジプトと王の家全体を治める大臣に任じました。

(1) 族長たちのヨセフに対する妬みは強烈であった。

①彼らは、ヨセフをエジプトに売り飛ばした。

＊約 1500 年間、ユダヤ人の思考の中で、エジプトは異邦人による抑圧の原型であり続けた。

②しかし、神は彼とともにおられた。

(2) 神はヨセフを守り、すべての出来事をご自身の計画の成就のために導かれた。

①その結果、ヨセフは「エジプトと王の家全体を治める大臣」に抜擢された。

②ヨセフは、兄弟たちからは拒否されたが、異邦人たちには受け入れられた。

③彼は、神の御手により高く上げられた。

2. 11～12 節

Act 7:11 ところが、エジプトとカナンとの全地にききんが起り、大きな災難が襲って来たので、私たちの父祖たちには、食物がなくなりました。

Act 7:12 しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、初めに私たちの父祖たちを遣わ

しました。

- (1) 族長たちは、食物を求めてエジプトに 2 度下ることになった。
 - ①エジプト下りの背景は、エジプトとカナンの地を襲った大飢饉である。
 - ②そのため、エジプトに行かざるを得なくなった。
 - ③最初のエジプト下りの時は、族長たちはヨセフを認識することができなかった。

3. 13～14 節

Act 7:13 二回目のとき、ヨセフは兄弟たちに、自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがパロに明らかになりました。

Act 7:14 そこで、ヨセフは人をやって、父ヤコブと七十五人の全親族を呼び寄せました。

- (1) 2 回目の訪問で、族長たちは、ヨセフがエジプトの宰相になったことを認識した。
- (2) イスラエルの民は、エジプトに移住した。
 - ①創 46 : 27 と出 1 : 5 では、70 人となっている。
 - ②七十人訳聖書では、75 人となっている。
 - ③ステパノは、七十人訳聖書を採用している。
 - ④75 人は、70 人にヨセフの孫 5 人を足した数字だと思われる（1 歴 7 : 14～27）。

4. 15～16 節

Act 7:15 ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。

Act 7:16 そしてシケムに運ばれ、かねてアブラハムがいくらかの金でシケムのハモルの子から買っておいだ墓に葬られました。

- (1) ステパノは、族長たちがシェケムに埋葬されたと述べている。
 - ①シェケムは、約束の地における重要な町である。
 - ②紀元 1 世紀には、シェケムはサマリヤの中心都市であった。
 - ③ここでのシェケムへの言及は、次の展開（サマリヤ人伝道）への布石である。
- (2) 「かねてアブラハムがいくらかの金でシケムのハモルの子から買っておいだ墓」
 - ①矛盾点①
 - *ヨセフはシェケムに葬られた（ヨシ 24 : 32）。
 - *ヤコブはヘブロンに葬られた（創 50 : 13）。
 - ②矛盾点②
 - *アブラハムは、ヘテ人からヘブロンにある畑地と墓地を買った。
 - *ハモルの子からシェケムの墓を買ったのは、ヤコブである。
 - ③解決策

*ステパノは、2つの物語を一つにまとめて語っている。

④ルカは、表面的な矛盾を修正していない。

*ステパノの弁明を忠実に再現している証拠である。

結論：

1. アブラハムの物語の適用

- (1) ユダヤ教の土台は、トーラーや神殿ではない。
- (2) ユダヤ教の土台は、神の愛と神の計画（守り）である。
- (3) 神の愛と神の計画の啓示が、アブラハム契約である。
- (4) アブラハム契約のしるしが、割礼である。
- (5) 割礼が、ユダヤ人の自己認識の土台であり、神との関係の土台である。
- (6) 創17：9～10

Gen 17:9 ついで、神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、あなたの後のあなたの子孫とともに、代々にわたり、わたしの契約を守らなければならない。

Gen 17:10 次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。

- (7) 神の愛と計画に応答する信仰がなければ、割礼は無意味である。
- (8) キリスト教には、洗礼や聖餐式という聖礼典がある。
- (9) しかし、神の愛と計画に応答する信仰がなければ、聖礼典は無意味である。

2. ヨセフの物語の適用

- (1) ヨセフは、旧約聖書の中で最も顕著なメシアの型である。
 - ①聖書は、直接的にそう述べていないが、状況証拠からそう言える。
- (2) 族長たちは、最初のエジプト下りではヨセフを認識することができなかった。
 - ①彼らがヨセフを認識したのは、2度目のエジプト下りのときであった。
- (3) ステパノの意図は、ヨセフとイエスの対比である。
 - ①ヨセフの兄弟たちは、妬みによってヨセフを奴隷に売った。
 - ②しかしヨセフは、彼らの救い主となった。
 - ③ステパノの聴衆は、ヨセフ物語を聞きながら、心が探られたはずである。
 - ④神の民は、初臨においては、イエスがメシアであることを認識できなかった。
 - ⑤彼らがイエスをメシアとして受け入れるのは、大患難時代の終わりの時である。
 - ⑥神の民がイエスをメシアとして受け入れ祈るときに、メシアの再臨が起こる。
- (4) 人から拒否されたお方が、高く上げられた救い主となられた。

「ステパノの弁明（2）」

使徒 7：17～43

1. はじめに

(1) ステパノは、使徒の働き物語の岐路に立つ人物である。

①ステパノの裁判が始まる。

②偽証人たちは、ステパノがユダヤ教の 4 つの土台を冒瀆していると攻撃した。

＊神、モーセ、トラー、神殿

(2) ステパノの弁明

①この弁明は、使徒の働きの中で最も長いメッセージである。

②この弁明は、歴史的事実の羅列ではなく、旧約聖書の組織神学である。

(3) ステパノの弁明の 6 つのポイント（7：1～53）

①アブラハム：ユダヤ教の土台（7：1～8）

②ヨセフ：拒否された者が高く上げられ救い主になった（7：9～16）。

③モーセ：拒否された者が解放者になった（7：17～40）。

④イスラエルの慢性的罪：偶像礼拝（7：41～43）

⑤神殿：神の臨在の普遍性（7：44～50）

⑥イスラエルの民の糾弾：常に聖霊に逆らっている（7：51～53）。

2. アウトライン

(3) モーセ：拒否された者が解放者になった（7：17～40）。

(4) イスラエルの慢性的罪：偶像礼拝（7：41～43）

結論：

(1) モーセの物語の要約

ステパノの弁明について学ぶ。

Ⅲ. モーセ：拒否された者が解放者になった（7：17～40）。

1. 17～18 節

Act 7:17 神がアブラハムにお立てになった約束の 때가 近づくにしたがって、民はエジプトの中にふえ広がり、

Act 7:18 ヨセフのことを知らない別の王がエジプトの王位につくときまで続けました。

(1) ヨセフと同じように、モーセもまた解放者である。

- ①エジプト滞在中に、イスラエルの民はふえ広がり、一大民族となった。
- ②モーセの登場は「神がアブラハムにお立てになった約束の時」が近づいた証拠。
- ③出エジプトの出来事は、アブラハム契約の成就として解釈する必要がある。
*アブラハム契約は、ユダヤ教の土台である。

(2) 「ヨセフのことを知らない別の王」

- ①ヨセフのことを知らない別の王（パロ）が登場した。

Exo 1:8 さて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。

- ②「新しい」（ハダッシュ）は、七十人訳聖書で「ヘテロス」と訳されている。
- ③ステパノは、七十人訳聖書を引用している。
- ④「ヘテロス」という言葉は、新しい王朝になったことを示唆している。
- ⑤新しい王朝になったときから、反ユダヤ的政策が始まる。

2. 19～21 節

Act 7:19 この王は、私たちの同胞に対して策略を巡らし、私たちの父祖たちを苦しめて、幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。

Act 7:20 このようなときに、モーセが生まれたのです。彼は神の目にかなった、かわいらしい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、

Act 7:21 ついに捨てられたのをパロの娘が拾い上げ、自分の子として育てたのです。

- (1) エジプトは、人類の歴史上、最初に反ユダヤ主義を政策に取り入れた国である。
 - ①パロは、ヘブル人の幼子が男なら殺すように命じた。
 - ②次のパロは、生まれた男の子はみなナイルに投げ込むように命じた。
- (2) モーセが誕生したとき、両親は幼子を3ヶ月間家に隠して育てた。
 - ①それができなくなると、幼子をナイル川に浮かべた。
 - ②パロの娘がその幼子を拾い上げ、王宮で自分の子として育てた。

3. 22 節

Act 7:22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。

- (1) ルカは、モーセの学問について詳しくは書いていない。
 - ①モーセは、エジプトの王子として帝王学を学んだ。
 - ②ヨセフスとフィロンがそれに言及している。
 - ③数学、幾何学、音楽、文学、天文学、著述、哲学

(2)「ことばにもわざにも力がありました」

①モーセの能力は秀でていた。

②しかし彼には、2つのアイデンティティがあった。

＊二重国籍のような状態。エジプト人なのか、ヘブル人なのか。

③40歳になって、彼はヘブル人としてのアイデンティティを選ぶことにした。

4. 23～25 節

Act 7:23 四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。

Act 7:24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人のかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。

Act 7:25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みなが理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。

(1) 彼は、神が自分を同胞の解放者として立てたと確信した。

①虐待される同胞をかばい、エジプト人を殺し、その死体を隠した。

②彼は、同胞の解放者として行動を開始したのである。

(2) モーセは、同胞が自分のことを理解してくれるだろうと思った。

①同胞は、自分に周りに集まり、自分を支持してくれるだろう。

②しかし彼らは、モーセを解放者として受け入れなかった。

5. 26～29 節

Act 7:26 翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現れ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか』と言いました。

Act 7:27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけてこう言いました。『だれがあなたを、私たちの支配者や裁判官にしたのか。』

Act 7:28 きのうちエジプト人を殺したように、私も殺す気か。』

Act 7:29 このことばを聞いたモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました。

(1) 翌日、モーセは争っている兄弟たちの仲裁役を買って出た。

①争いを仕掛けた人が、モーセに抵抗した。

②「だれがあなたを、私たちの支配者や裁判官にしたのか」

③「きのうエジプト人を殺したように、私も殺す気か」

④神はモーセを解放者として任命していたが、ヘブル人たちはモーセを拒否した。

(2) そこでモーセは、ミデアンの地に逃れた。

①エジプト人を殺したことが知れ渡っているのに、エジプト人の報復を恐れた。

②ミデアンの地で異邦人の妻をめとり、二人の男の子を育てた。

＊異邦人の地でのモーセを、神は祝された。

6. 30～32 節

Act 7:30 四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現れました。

Act 7:31 その光景を見たモーセは驚いて、それをよく見ようとして近寄ったとき、主の御声が聞こえました。

Act 7:32 『わたしはあなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』そこで、モーセは震え上がり、見定める勇気もなくなりました。

(1) 40年後、80歳の時に、神は燃える柴の中でモーセに現れた。

①神は、ご自身を契約の御名で呼ばれた。

＊「アブラハム、イサク、ヤコブの神」

②神は、約束の地から遠く離れた地でご自身を啓示された。

③モーセは、非常に恐れた。

7. 33～34 節

Act 7:33 すると、主は彼にこう言われたのです。『あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である。』

Act 7:34 わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。』

(1) 「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である」

①約束の地だけでなく、神が臨在される所はすべて聖なる地である。

(2) 神は確かにモーセをイスラエルの解放者、支配者として立てた。

①イスラエルの民はモーセを解放者と認めていないが、エジプトに行けという。

8. 35～36 節

Act 7:35 『だれがあなたを支配者や裁判官にしたのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は柴の中で彼に現れた御使いの手によって、支配者また解放者としてお遣わしになったのです。

Act 7:36 この人が、彼らを導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年間荒野で、不思議なわざとしるしを行いました。

- (1) ヨセフの場合と同じことが起こった。
 - ①イスラエルの民は、最初モーセを拒否した。
 - ②モーセが2度目に現れたときに、彼らはモーセを信じた。
 - ③拒否された者が高く上げられ、解放者として受け入れられた。
- (2) モーセは、エジプトの地で、紅海で、荒野で、奇跡を行った。
 - ①「また四十年間荒野で、不思議なわざとしるしを行いました」
 - ②モーセが神によって立てられた解放者であることが明らかになった。

9. 37～38 節

Act 7:37 このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる』と言ったのです。

Act 7:38 また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。

- (1) このモーセが、メシアの到来を預言した。
 - ①「私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる」
 - ②モーセのような預言者とは、メシアのことである。
 - ③申 18：15～19
 - ④律法学者には、イエスが「モーセのような預言者」であることは明白である。
*イエスは、不思議なわざとしるしを行われた。
 - ⑤しかし彼らは、このイエスを殺した。
- (2) このモーセが、神がイスラエルの民に律法を与えるための仲介者となった。
 - ①彼は、シナイ山の上で神のことばを受け取った。

10. 39～40 節

Act 7:39 ところが、私たちの父祖たちは彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、

Act 7:40 『私たちに、先立って行く神々を作ってください。私たちをエジプトの地から導き出したモーセは、どうなったのかわかりませんから』とアロンに言いました。

- (1) 民は再びモーセを退けた。
 - ①モーセがシナイ山の上にいる間に、民は偶像を作り、それを礼拝した。
 - ②この拒否は、最初の拒否とは本質的に異なる。

*この拒否は、出エジプト体験の後で起こった拒否である。

*この拒否は、神ご自身の拒否であり、律法の拒否である。

IV. イスラエルの慢性的罪：偶像礼拝（7：41～43）

1. 41 節

Act 7:41 そのころ彼らは子牛を作り、この偶像に供え物をささげ、彼らの手で作った物を楽しんでいました。

(1) 金の子牛事件は、ほんの始まりに過ぎなかった。

①約束の地に入るなり、イスラエルの民は偶像礼拝を行った。

②イスラエルの民は、偶像礼拝の傾向を強めて行った。

③イスラエルの民の歴史は、神への反抗の歴史である。

2. 42～43 節

Act 7:42 そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の星に仕えるままにされました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。／『イスラエルの家よ。あなたがたは／荒野にいた四十年の間に、／ほふられた獣と供え物とを、／わたしにささげたことがあったか。

Act 7:43 あなたがたは、モロクの幕屋と／ロンパの神の星をかついでいた。／それらは、あなたがたが拝むために／作った偶像ではないか。／それゆえ、わたしは、あなたがたを／バビロンのかなたへ移す。』

(1) 神は、イスラエルの民を放置した。

①その思いのままにさせた。

(2) アモス書からの引用

①アモ 5：25

Amo 5:25 「イスラエルの家よ。／あなたがたは、荒野にいた四十年の間に、／ほふられた獣とささげ物とを／わたしにささげたことがあったか。

②アモ 5：26～27

Amo 5:26 あなたがたはあなたがたの王サクテと、／あなたがたのために造った星の神、キウンの像を／かついでいた。

Amo 5:27 わたしはあなたがたを、／ダマスコのかなたへ捕らえ移す」と／その名を万軍の神、**【主】**という方が仰せられる。

(3) ステパノが今戦っている相手は、偶像礼拝の民の子孫たちである。

結論：モーセの物語の要約

1. ステパノによる要約

- (1) 誕生、幼年時代、エジプトでの教育
- (2) 同胞からの拒否

Act 7:25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みんなが理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。

- ①モーセは、キリストの型である。
- (3) ミデアンの地での寄留生活
- (4) 神の顕現と、モーセのエジプトへの派遣
- (5) イスラエルの民の解放者
- (6) 「モーセのような預言者」の預言
- (7) 同胞からの2度目の拒否
 - ①イスラエルの民は、金の子牛を礼拝した。
 - ②イスラエルの民の偶像礼拝の性質は、歴史を通して一貫している。
 - ③偶像礼拝に下る罰が、バビロン捕囚である。

2. 歴史は繰り返す。

- (1) イスラエルの民は、神が遣わした解放者をすぐに認識することができない。
- (2) イエスもまた、ご自分の民から拒否された。
 - ①ペテロは明確にそれを伝えた。

Act 3:13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。

- (3) 再臨の際には、イスラエルの民はイエスがメシアであることを受け入れる。
 - ①ヨセフの生涯に起こったことと同じパターンである。
 - ②モーセの生涯に起こったことと同じパターンである。
- (4) モーセは、自分の兄のアロンにさえも裏切られた。
 - ①アロンが、金の子牛のデザイナーである。
 - ②アロンは、初代の大祭司である。
- (5) ステパノは、モーセに反抗した世代の子孫たちの前に立っている。
 - ①モーセに反抗した世代は、旧約時代において最も霊的に頑なな世代である。
 - ②イエスに反抗した世代は、それよりもさらに頑なな世代である。
- (6) 日本人も、一度はキリストを拒否した。
- (7) 二度目には、キリストを受け入れるように祈ろう。

「ステパノの弁明（3）」

使徒7：44～53

1. はじめに

(1) ステパノは、使徒の働きのお話の岐路に立つ人物である。

①ステパノの裁判が始まる。

②偽証人たちは、ステパノがユダヤ教の4つの土台を冒涇していると攻撃した。

＊神、モーセ、トラー、神殿

(2) ステパノの弁明

①この弁明は、使徒の働きの中で最も長いメッセージである。

②この弁明は、歴史的事実の羅列ではなく、旧約聖書の組織神学である。

③これまでにステパノは、神、モーセ、トラーについて論じた。

④残されているのは、神殿だけである。

(3) ステパノの弁明の6つのポイント（7：1～53）

①アブラハム：ユダヤ教の土台（7：1～8）

②ヨセフ：拒否された者が高く上げられ救い主になった（7：9～16）。

③モーセ：拒否された者が解放者になった（7：17～40）。

④イスラエルの慢性的罪：偶像礼拝（7：41～43）

⑤神殿：神の臨在の普遍性（7：44～50）

⑥イスラエルの民の糾弾：常に聖霊に逆らっている（7：51～53）。

2. アウトライン

(5) 神殿：神の臨在の普遍性（7：44～50）

(6) イスラエルの民の糾弾：常に聖霊に逆らっている（7：51～53）。

結論：神の計画の進展

(1) 律法の時代から恵みの時代へ

(2) ユダヤ人信者と律法の関係

(2) 恵みの時代と異邦人

ステパノの弁明について学ぶ。

V. 神殿：神の臨在の普遍性（7：44～50）

1. 44節

Act 7:44 私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。

(1) ステパノは、神殿のテーマに入る前に、幕屋を取り上げる必要があった。

①イスラエルの民は、荒野で幕屋を造った。

②これは、「あかしの幕屋」と呼ばれている。

＊「あかしの箱」（契約の箱）が至聖所に置かれていた。

＊「あかしの箱」には、十戒が書かれた石版が2枚入っていた。

③出 25 : 16

「わたしが与えるさとしをその箱に納める」（新改訳）

「そしてその箱に、わたしがあなたに与えるあかしの板を納めなければならない」

（口語訳）

(2) あかしの幕屋は、神がモーセに示した設計図通りに造られた。

①幕屋の目的は、神の臨在がその中に現れるためである。

②神の臨在は、荒野に現れた。

③神の臨在が現れる場所は、エルサレムに限定されていない。

2. 45 節

Act 7:45 私たちの父祖たちは、この幕屋を次々に受け継いで、神が彼らの前から異邦人を追い払い、その領土を取らせてくださったときには、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ついにダビデの時代となりました。

(1) 幕屋は、折りたたんで、持ち運び可能な構造になっていた。

①イスラエルの民は、荒野の旅で幕屋を持ち運んだ。

②イスラエルの民は、代々幕屋を受け継いできた。

③イスラエルの民は、カナン征服の際にも、幕屋をその地に運び入れた。

(2) 幕屋は、ヨシュアの時代からダビデの時代まで、用いられた。

①ダビデの時代には、神殿はまだ建ってなかった。

3. 46～47 節

Act 7:46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの神のために御住まいを得たいと願い求めました。

Act 7:47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした。

(1) ダビデは、神殿建設を願った。

①ヤコブの神（イスラエルの神）のために。

②仮住まいではなく、御住まいを用意したい。

③しかし、ダビデの願いは聞かれなかった。

(2) 息子のソロモンが、神殿を建てた。

①このとき、神殿は幕屋に取って代わった。

②ステパノは、神殿を過小評価しているわけではない。

③ダビデもまた、神から示された設計図を持っていた。

④1 歴 28 : 19

1Ch 28:19 「これらすべては、主の御手がわたしに臨んで記されたもので、計画された工事の全貌を理解させてくれる。」（新共同訳）

⑤ソロモンは、その設計図に従って神殿を建設した。

4. 48～50 節

Act 7:48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。

Act 7:49 『主は言われる。／天はわたしの王座、／地はわたしの足の足台である。／あなたがたは、どのような家を／わたしのために建てようとするのか。／わたしの休む所とは、どこか。

Act 7:50 わたしの手が、これらのものを／みな、造ったのではないか。』

(1) しかし、ダビデとソロモンの意図とは異なり、神は人間が造った家に閉じ込められる方ではない。

①神は、宇宙の創造主である。

②天は神の王座、地は神の足の足台である。

(2) ソロモンの祈り（1 列 8 : 27）

1Ki 8:27 それにしても、神ははたして地の上に住まわれるのでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。

(3) イザヤの預言（66 : 1～2）

Isa 66:1 【主】はこう仰せられる。／「天はわたしの王座、地はわたしの足台。／わたしのために、あなたがたの建てる家は、／いったいどこにあるのか。／わたしのいこいの場は、／いったいどこにあるのか。

Isa 66:2 これらすべては、わたしの手が造ったもの、／これらすべてはわたしのものだ。／——【主】の御告げ——／わたしが目を留める者は、／へりくだって心砕かれ、／わたしのこ

とばにおののく者だ。

(4) パウロのメッセージ（使 17：24）

Act 17:24 この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。

(5) ステパノは、神殿での礼拝を否定していない。

- ①彼は、神殿を正しく位置づけることの重要性を強調している。
- ②神殿が不要になる時代が来ようとしている。
- ③その時代への準備はできているかと問うているのである。
- ④サドカイ人にとっては、死活問題である。

VI. イスラエルの民の糾弾：常に聖霊に逆らっている（7：51～53）。

1. 51 節

Act 7:51 かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。

(1) ここから、ステパノの弁明がクライマックスに入る。

- ①ここでのステパノの言葉と姿は、旧約聖書の預言者を彷彿とさせる。
- ②これまでは、三人称で語っていた。
- ③ここからは、サンヘドリンに対して二人称で激しく語りかける。

(2) 「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち」という呼びかけ

①「かたくな」

*出 32：9、33：3、5、34：9、申 9：6、10：16

②「心と耳とに割礼を受けていない人たち」

*レビ 26：41、申 10：16、エレ 4：4、6：10、9：26、エゼ 44：7

③「いつも聖霊に逆らっている」

*イザ 63：10

Isa 63:10 しかし、彼らは逆らい、／主の聖なる御霊を痛ませたので、／主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。

2. 52 節

Act 7:52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい

方を裏切る者、殺す者となりました。

(1) 先祖たちの罪

- ① 預言者たちを迫害した。
- ② 「正しい方」(メシア)の到来を預言した預言者たちを殺した。

(2) ここまでステパノは、イエスという名を出すことを控えてきた。

- ① ここでは、「正しい方」がイエスである。
- ② 「正しい方」とは、受難のしもべのタイトルである。
- ③ イザ 53:11

Isa 53:11 彼は、自分のいのちの／激しい苦しみのあとを見て、満足する。／わたしの正しいしもべは、／その知識によって多くの人を義とし、／彼らの咎を彼がになう。

(3) サンヘドリンが裏切り、殺したのはこの「正しい方」(メシア)である。

- ① イスカリオテのユダの罪は、裏切りである。
- ② サンヘドリンの罪は、裏切り＋殺人である。

3. 53 節

Act 7:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

(1) イスラエルの民は、一貫して神に反抗し、律法を否定してきた。

- ① 律法の付与には、御使いたちが関係していた。

＊使 7:38 参照

(2) イスラエルの民の反抗は、ヘブル語聖書の証言と合致している。

- ① 2 歴 36:15~16

2Ch 36:15 彼らの父祖の神、【主】は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。

2Ch 36:16 ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、【主】の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。

結論：神の計画の進展

(1) 律法の時代から恵みの時代へ

- ① 神は、ご自分の栄光のために歴史を導かれる。
- ② 神の計画は、神の栄光のために進んで行く。

③神の経綸（ディスペンセーション）は、律法の時代から恵みの時代に入った。

④律法の時代において神殿が持っていた役割は、終わった。

*モーセの律法が要求する祭儀の体系は、不要になった。

(2) ユダヤ人信者と律法の関係

①ユダヤ人信者は、モーセの律法から解放され、キリストの律法に従う者となった。

②モーセの律法に関しては、それを行う自由も、行わない自由もある。

③律法を行う人は、そうすることが救いや聖化に役立つと思ってはならない。

④また、行わない人を批判してはならない。

⑤律法を行わない人は、行う人を批判してはならない。

(3) 恵みの時代と異邦人

①異邦人は、最初からモーセの律法の下にはいなかった。

②モーセの律法は、エジプトを出た契約の民に与えられたものである。

③異邦人にとっての律法とは、基本的には良心である。

④恵みの時代になり、異邦人もまた、恵みと信仰によって、救われるようになった。

⑤異邦人信者は、今はキリストの律法の下にいる。

⑥ロマ書7章クリスチャンからロマ書8章クリスチャンへの変化が必要である。

「ステパノの死」

使徒7:54～8:4

1. はじめに

(1) ステパノは、使徒の働き物語の岐路に立つ人物である。

①偽証人たちは、ステパノがユダヤ教の4つの土台を冒瀆していると攻撃した。

②ステパノの弁明は、使徒の働きの中で最も長いメッセージである。

③この弁明は、サンヘドリンの議員たちを怒らせた。

④その結果、ステパノは石打の刑で殺される。

⑤ステパノの死を境に、物語の中心は、ペテロからパウロに以降していく。

2. アウトライン

(1) ステパノの死 (7:54～60)

(2) サウロによる教会の迫害 (8:1～4)

結論

(1) 石打の刑はローマ法違反ではないか。

(2) 迫害と種蒔きのたとえの関係は何か。

ステパノの死とその結果について学ぶ。

I. ステパノの死 (7:54～60)

1. 54節

Act 7:54 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりした。

(1) 原文には、「人々」という言葉はない。

①動詞から判断される主語は、「彼ら」(they)である。

②「彼ら」とは、サンヘドリンの議員たちとそこにいた群衆である。

*サンヘドリンでの裁判は、公開である。

(2) 訳文の比較

①「はらわたが煮え返る思いで、」(新改訳)

②「激しく怒り、」(新共同訳)

③「心の底から激しく怒り、」(口語訳)

④「心いかりに満ち」(文語訳)

⑤ギリシア語で「ディアプリオウ」という動詞

*使5:33では、「怒り狂い」という訳(ペテロのメッセージへの反応)。

*「they were cut to the heart」(KJV、ASV)

*「心が切り裂かれた」「グサツときた」

(3)「ステパノに向かって歯ざしりした」

①空腹の狼が獲物に向う様子を想像すればよい。

②前回と違い、この時はガマリエルのような冷静な仲介者はいなかった。

③ステパノは、自らの死を覚悟したはずである。

2. 55～56節

Act 7:55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、

Act 7:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

(1) ステパノは、聖霊の支配下にあった。

①彼は、怒り狂った群衆を見るのではなく、天を見つめた。

②彼には、シャカイナグローリーとイエスを見ることが許された。

(2)「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」

①彼の言葉は、単に見えているものを伝えているだけではない。

②彼は、サンヘドリンの裁判でのイエスの最後の言葉を伝えている。

③ルカ22:69(マタ26:64、マコ14:62)

Luk 22:69 しかし今から後、人の子は、神の大能の右の座に着きます。」

④この言葉によって、イエスは冒瀆罪とされた。

⑤ステパノも、この言葉によって冒瀆罪が確定する。

(3)「人の子が神の右に立っておられる」

①詩110:1への言及である(ペテロがペンテコステの日のメッセージで引用)。

Psa 110:1 【主】は、私の主に仰せられる。／「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、／わたしの右の座に着いていよ。」

②「人の子」には、2つの意味がある。

*人間を意味する場合

*メシアの称号(ダニ7:13～14)の場合

③イエスは、「ダビデの子」よりも「人の子」を好まれた。

④人の子が神の右の座に座しているというのが、通常の表現である。

⑤ここでは、神の右に立っておられる。

＊最初の殉教者ステパノを迎えようとして立っておられるのであろう。

3. 57 節

Act 7:57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。

(1) 群衆は、自分を制することができなくなった。

①大声で叫ぶ、耳をおおう、いっせいにステパノに殺到する。

＊「いっせいに」は、「心を一つにして」(with one accord) である。

②「殺到する」は、ギリシア語で「ホルマオウ」である。

＊ルカ 8 : 33 で同じ動詞が使われている。

Luk 8:33 悪霊どもは、その人から出て、豚に入った。すると、豚の群れはいきなりがけを駆け下って湖に入り、おぼれ死んだ。

4. 58 節

Act 7:58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。

(1) 神殿域での死刑は許されないので、エルサレムの境界線の外に追い出した。

①怒っていても、その程度の判断力は残っていたのである。

(2) ミシュナが示す手順から推定される死刑の様子

①ステパノは、町の外の崖に連れ出され、着ている物をはぎ取られる。

②偽証人のひとりが、ステパノを崖の下（最低 3. 6 メートル）に突き落とす。

＊この段階で首の骨を折り、死ぬ可能性も大いにある。

③別の偽証人が最初に石を投げ、次に、すべての証人たちが石を投げる。

④それに続いて、群衆が石を投げる。

＊正確さを確保するために、石を投げる者たちは着物を脱いだ。

(3) **「証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた」**

①ここでサウロが登場するのは、使徒の働きの後半の展開を考えてのことである。

②青年（ネアニアス）とは、40 歳までの人を言う。

＊恐らくサウロは 30 歳前後であろう。

＊かつて、リベルテンの会堂でステパノと論争した可能性も大である

③サウロは着物の番をした。

＊サンヘドリンの議員ではないが、議会でなんらかの地位が与えられていた。

*彼は、ガマリエルの筆頭弟子として、裁判を傍聴していたのであろう。

5. 59 節

Act 7:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」

(1) 飛んで来る石の衝撃を感じながら、彼はイエスに言った。

①「主イエスよ。私の霊をお受けください」

②ルカ 23 : 46

Luk 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

③ステパノは、主イエスに自分の霊を委ねた。

④これは、イエスの神性を証明する聖句である。

6. 60 節

Act 7:60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。

(1) ユダヤ人の習慣

①石打の前に、自分の罪を告白する。

②あるいは、単に「私の死が、私のすべての罪の贖いとなるように」と祈る。

(2) ステパノの場合

①ひざまずいて、大声で叫んだ。

②リーダーたち、偽証人たち、群衆に聞こえるように。

③「主よ。この罪を彼らに負わせないでください」

④ルカ 23 : 34

Luk 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

(3) 「眠りについた」

①死を示す婉曲語である。

②彼の肉体は、動かなくなった。

③彼の魂は、神のもとに帰った。

④復活のとき、肉体と魂が合体する。

II. サウロによる教会の迫害（8：1～4）

1. 1節

Act 8:1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。／その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

(1) 「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた」

- ①「スنعードケオウ」には、同意する、喜びを覚える、などの意味がある。
- ②上着の番をすることは、その賛意を公に示すことである。
- ③サウロは、師のガマリエルの助言を無視した。
- ④イエスの弟子たちのメッセージは、ユダヤ教の土台を揺るがすものだと感じた。
- ⑤彼は、教会を迫害する者たちの急先鋒となった。

(2) サドカイ派とパリサイ派がひとつになって、教会を迫害した。

- ①エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こった。
- ②パリサイ派は、最早教会に対して寛容なグループではなくなった。
- ③使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

＊ヤコブの手紙とペテロの手紙は、離散したユダヤ人信者に宛てたもの。

Jas 1:1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。

1Pe 1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、

(3) 使徒たちがエルサレムに留まることができた理由は何か。

- ①サンヘドリンは、使徒たちへの迫害が好ましくない結果をもたらした経験をしている。
- ②サンヘドリンは、草の根レベルで教会を迫害しようとしたのであろう。

2. 2節

Act 8:2 敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のために非常に悲しんだ。

(1) ユダヤ法によれば、石打の刑で死んだ者を葬るのは、違法である。

- ①しかし、「敬虔な人たち」は、ステパノを葬った。
- ②これは、イエスの弟子ではない、信仰的なユダヤ人たちである。
- ③恐らく彼らは、ステパノの裁判を傍聴していたのであろう。
- ④「彼のために非常に悲しんだ」は、彼の語ることに感銘を受けたということ。

3. 3 節

Act 8:3 サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。

(1) サウロは、人々が家の教会で礼拝しているときに、そこを襲った。

- ①男も女も逮捕された。
- ②これまでは、逮捕されたのは男だけだった。
- ③サウロの怒りから免れる者は、ひとりもいなかった。

(2) さらにサウロは、シナゴグにまで入り、信者は逮捕した。

Act 22:19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。』

- ①初期の信者たちは、ユダヤ人共同体からの分離を願ったわけではない。
- ②ユダヤ教の指導者たちが、分離を強制的に促したのである。

4. 4 節

Act 8:4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

(1) 教会は、敗北したのではなく、拡散したのである。

- ①彼らは、福音を伝える対象を、ユダヤ人から異邦人に拡大していく。
- ②いよいよ、種蒔きの時代が到来したのである。

結論

1. 石打の刑はローマ法違反ではないか。

- (1) ユダヤ人たちには、死刑を執行する権利がなかった。
- (2) イエスを死刑にするためには、ローマの法廷で有罪を勝ち取る必要があった。
- (3) ステパノの死刑は、ローマの法廷とは無関係に行われた。
- (4) イエスの裁判とステパノの裁判の違い
 - ①イエスは有名であり、ステパノは無名である。
 - ②イエスの場合は、民衆の怒りを買う可能性があった。
 - *民衆が騒動を起した場合、指導者たちも反逆罪に問われる恐れがあった。
 - ③ステパノの場合は、自分たちで裁いても暴動が起こる可能性はないと判断した。
 - *ピラトは、本国での政治問題に巻き込まれていた。
 - *それゆえ、無名の男の死刑を問題視する可能性はないと判断した。

2. 迫害と種蒔く人のたとえの関係は何か。

- (1) 教会時代は、奥義としての王国の時代である。

①その特徴は、福音の伝達が行われることである。

*マコ 4 : 3～23、マタ 13 : 3～23、ルカ 8 : 5～18

②ユダヤ教には、宣教師はいない。

③キリスト教は、その最初から伝道的である。

④種蒔く人のたとえば、福音に対して 4 種類の応答が起こることを教えている。

(2) 象徴的言葉

①種とは、みことばのことである。

②種蒔く人が誰かは解説されていないが、それは容易に推察される。

*イエスご自身

*イエスの代理人としての弟子たち

*奥義としての御国に住むすべての信者たち

(3) 4 つの土地の意味

①道ばた

*福音を聞いても、信じないことを選ぶ人たち

*福音の真理は、自分の生活には無関係であると考え人々たち

②岩地

*信じるが、みことばに根差した信仰を持たない人々たち

*みことばの乳から堅い肉に進もうとしない人々たち

*困難や迫害が来ると、容易につまずく人々たち

③いばらの地

*信じるが、霊的勝利を自分のものにできない人々たち

*信仰生活と、この世の生活とが、別区分になっている人々たち

④良い地

*みことばに根差した信仰を持つ人々たち

*彼らの存在は周りの人々に良い影響を与え、多くの魂が救いに導かれる。

「サマリヤ人伝道（1）」

使徒8：5～13

1. はじめに

(1) ステパノの死をきっかけに、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こった。

①使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

②サウロは、教会への迫害を始めた。

③使8：4

Act 8:4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

④イエスが「種を蒔く人」のたとえ話の中で語っておられた状況が訪れた。

⑤ピリポは、2つの民族的なバウンダリーを越えて行く。

*大きなバウンダリーは、サマリヤ人との間にあったものである。

*小さなバウンダリーは、エチオピア人の改宗者との間にあったものである。

(2) 「サマリヤ人伝道」のアウトライン

①ピリポの伝道（5～8節）

②魔術師シモンの信仰（9～13節）

③ペテロとヨハネの訪問（14～17節）

④魔術師シモンの罪（18～25節）

2. アウトライン

(1) ピリポの伝道（5～8節）

(2) 魔術師シモンの信仰（9～13節）

結論

(1) サマリヤ人とユダヤ人の敵対の歴史

(2) 神のマスタープラン

ピリポのサマリヤ人伝道について学ぶ。

I. ピリポの伝道（5～8節）

1. 5節

Act 8:5 ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。

(1) このピリポは、使徒ピリポではなく、7人の世話役のひとりである（使6：5）。

①世話役のリストでは、ステパノに続いて2番目にその名が出て来る。

②ヘレニストのユダヤ人。ヘブライストのユダヤ人よりも開放的。

③ステパノ同様、伝道者の賜物が与えられていた。

④使徒たちの近くにおり、使徒たちから権威を委譲されていた（使6:6）。

Act 6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。

(2) 「サマリヤの町に下って行き、」

①エルサレムからサマリヤまでは、地形的に下りである。

②サマリヤの町

*旧約聖書のサマリヤ（セバステ）ではない（当時はギリシア人の町）。

*ネアポリス（シェケム）である。

*シェケムは、サマリヤ人の信仰の中心地になっていた。

③当時、ユダヤ人とサマリヤ人は敵対関係にあった。

(3) 「人々にキリストを宣べ伝えた」

①ピリポのメッセージの中心は、キリストであった。

②キリストは、サマリヤの町ではすでに知られていた。

2. 6～7 節

Act 8:6 群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。

Act 8:7 汚れた霊につかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫んで出て行くし、多くの中風の者や足のなえた者は直ったからである。

(1) ピリポの伝道には、超自然的な現象がともなった。

①しるしは、基本的には使徒たちの奉仕に伴う祝福である。

*ステパノとピリポは、使徒たちから権威の委譲を受けていた。

*神は、しるしをもってピリポが語る内容を保証された。

②群衆は、ピリポが行うしるしには説得力があると感じた。

*奇跡はないという前提的真理に立っている人には、この箇所は信じ難い。

(2) しるしの内容

①悪霊が出て行った。

②多くの中風の者や足のなえた者が直った。

③使2:43と同じパターンである。

Act 2:43 そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われた。

④使3:9～10 とも同じである。

Act 3:9 人々はみな、彼が歩きながら、神を賛美しているのを見た。

Act 3:10 そして、これが、施しを求めるために宮の「美しの門」にすわっていた男だとわかると、この人の身に起こったことに驚き、あきれた。

3. 8 節

Act 8:8 **それでその町に大きな喜びが起こった。**

(1) 福音は、人々に大きな喜びをもたらす。

①使2:46～47

Act 2:46 そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、

Act 2:47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

II. 魔術師シモンの信仰（9～13 節）

1. 9 節

Act 8:9 **ところが、この町にシモンという人がいた。彼は以前からこの町で魔術を行って、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。**

(1) シモンは魔術師である。

①ピリポは神の力で、シモンは悪霊の力で動いていた。

②人々を驚かすことが、彼のゴールである。

③自称「偉大な者」(some great one)

(2) シモンに関する種々の伝承

①グノーシス主義の創始者

②ローマに行って、キリスト教の教理を曲げた（最初の異端を作り出した）。

③ペテロと奇跡コンテストを演じ、敗れた。

2. 10～11 節

Act 8:10 **小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き、「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ」と言っていた。**

Act 8:11 **人々が彼に関心を抱いたのは、長い間、その魔術に驚かされていたからである。**

(1) 「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ」

①サマリヤ人たちは、シモンに欺かれていた。

- ②人々が、シモンは神性を有していると考えたかどうかは明らかではない。
 - *少なくとも人々は、シモンは「神の力」の化身であると考えていた。
- ③一番の問題は、シモンがそのような賞賛を喜んで受け取っていたことである。

3. 12 節

Act 8:12 しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。

(1) 「神の国とイエス・キリストの御名」

- ①「神の国」とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

*使 1:3

Act 1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

*使 1:6

Act 1:6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」

②「イエス・キリストの御名について宣べる」

*イエス・キリストは神の国の王であるというメッセージ

③ピリポが伝えたメッセージの内容

*イエス・キリストは、今栄光の座に着いておられる。

*サマリヤ人も、イエスを信じることでメシア的王国の市民となれる。

(2) シモンの働きとピリポの働きの対比

- ①シモンは、悪霊の力によって関心を自分に集め、人々を驚かせた。
- ②ピリポは、神の力によって関心をイエスに向け、人々を回心に導いた。

(3) 「男も女もバプテスマを受けた」

- ①信じた証しとして、洗礼を受けた。
- ②すでに割礼を受けていたので、洗礼だけでユダヤ教に改宗することができた。
- ③このようなことは、普通は起こらない。
- ④サマリヤ人にとっては、ユダヤ人のメシアを信じるのは、裏切り行為である。
- ⑤ユダヤ人にとっては、サマリヤ人も救われると教えるのは、裏切り行為である。
- ⑥ステパノは、福音の普遍性を論じたために迫害された。
- ⑦ピリポも同じ神学的危険を犯したのである。

4. 13 節

Act 8:13 シモン自身も信じて、バプテスマを受け、いつもピリポについていた。そして、しるしとすばらしい奇蹟が行われるのを見て、驚いていた。

(1) シモン自身も信じて、バプテスマを受けた。

①シモンが救われたのかどうか、断定することはできない。

*その後の展開を見ると、その信仰が真実なものとは思えない。

②彼は、ピリポに付き従うようになった。

*その姿は、これまでシモンに従っていた人々に大きな影響を与えた。

(2) 「しるしとすばらしい奇蹟が行われるのを見て、驚いていた」

①ユダヤ教は、魔術師が悪魔の力によって奇蹟を行うことを認めていた。

②しかし、魔術師が発揮する力は、限定的なものであった。

③シモンは、ピリポが発揮する神の力の素晴らしさに驚いていた。

5. サマリヤ人の救いを教会が認定するかどうかという問題が残っている。

(1) 次回、その問題を取り上げる。

結論

1. サマリヤ人とユダヤ人の敵対の歴史

(1) アッシリヤ捕囚直後

①北王国の人々の中で、約束の地に留まることを許された人たちがいた。

②アッシリヤは、異民族をサマリヤの町々に住ませた。

③やがて雑婚により、サマリヤ人と呼ばれる人たちが出現した。

④2列17：25～29の説明

*異民族たちは、その地で偶像礼拝を始めた。

*【主】は獅子を送り、彼らを罰した。

*彼らは、アッシリヤの王に助けを求めた。

*捕囚になっていた祭司がベテルに来て、【主】を礼拝する方法を教えた。

*それでも、それぞれの民はめいめい自分たちの神々を礼拝した。

(2) サマリヤ宗教の誕生

①サマリヤ人たちは、ヤハウェ礼拝と偶像礼拝を混合させた。

②これが、サマリヤ宗教（Samaritanism）と呼ばれるものである。

③サマリヤ宗教の特徴

*唯一の神を礼拝する。

*モーセを敬う（モーセの五書だけを受け入れる）

*安息日を守り、割礼を実行する。

- ④ユダヤ人から見れば、これは異端である。
- ⑤ユダヤ人たちは、サマリヤ人とは交流しなかった。

(3) 捕囚から帰還後

- ①サマリヤ人たちは、神殿建設への参加を申し出たが、断られた。
- ②そこで彼らは、あらゆる手段を講じて工事を妨害した。
- ③ユダヤ人たちは、ゲリジム山にあった神殿を破壊した。
- ④サマリヤ人たちは、夜中に死体数体を神殿に運び込み、敵討ちをした。
- ⑤紀元 1 世紀には、両者の関係は最悪の状態にあった。

(4) そのバウンダリーを、ピリポが越えたのである。

2. 神のマスタープラン

(1) イエスによるサマリヤ人伝道（ヨハ 4：7～42）

- ①サマリヤの女が回心する。
- ②サマリヤの女が伝道者になる。
- ③ヨハ 4：42

Joh 4:42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

(2) 10 人のツァラアト患者の癒し（ルカ 17：15～18）

- ①感謝するために戻って来たのは、ひとりのサマリヤ人だけであった。

(3) イエスの宣教命令（使 1：8）

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

- ①エルサレムとユダヤ（ユダヤ人伝道）
- ②サマリヤの全土（サマリヤ伝道）
- ③地の果て（異邦人伝道）

*①と②の間にあるバウンダリーを越えるのは、ピリポである。

*②と③の間にあるバウンダリーを越えるのは、ペテロである。

(4) イエスは、神と罪人の間にあるバウンダリーを越えて下さった。

①私たちも、「神の国とイエス・キリストの御名について」宣べ伝えるのである。

Act 8:12 しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。

「サマリア人伝道（2）」

使徒8：14～25

1. はじめに

(1) ステパノの死をきっかけに、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こった。

①使8：4

Act 8:4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

②イエスが「種を蒔く人」のたとえ話の中で語っておられた状況が訪れた。

③ピリポは、2つの民族的なバウンダリーを越えて行く。

*大きなバウンダリーは、サマリア人との間にあったものである。

*小さなバウンダリーは、エチオピア人の改宗者との間にあったものである。

(2) 「サマリア人伝道」のアウトライン

①ピリポの伝道（5～8節）

②魔術師シモンの信仰（9～13節）

③ペテロとヨハネの訪問（14～17節）

④魔術師シモンの罪（18～25節）

(3) サマリア人の救いについて

①サマリア人の救いは、復活のキリストの計画の中にあった。

②これは、使徒たちにとっては予想外のことであるが、喜ばしいことでもあった。

③サマリア人は、ユダヤ人と異邦人の中間にいた人々である。

④ユダヤ人にとっては、サマリア人の救いを認めてよいのかという問題がある。

⑤サマリア人にとっては、ユダヤ人のメシアを信じてよいのかという問題がある。

⑥サマリア人の救いに関して、神からの承認が必要である。

2. アウトライン

(3) ペテロとヨハネの訪問（14～17節）

(4) 魔術師シモンの罪（18～25節）

結論

(1) ペンテコステの日の出来事とサマリアの町での出来事の対比

(2) ペテロの役割

ピリポのサマリヤ人伝道について学ぶ。

Ⅲ. ペテロとヨハネの訪問（14～17節）

1. 14節

Act 8:14 さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。

(1) ピリポは、エルサレムにいる使徒たちに使いを送り、助けを求めた。

①使徒たちは、「サマリヤ人の人々が神のことばを受け入れた」と聞いた。

②ピリポは、エルサレムの信者を説得するのは容易なことではないと思っていた。

③そこで、使徒たちをサマリヤの町に招き、調査を依頼したのである。

(2) エルサレム教会は、ペテロとヨハネをサマリヤの町に派遣した。

①申 19 : 15

Deu 19:15 どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

②ものごとを決するためには、ふたりか3人の証人の証言が必要である。

(3) ヨハネが派遣されたのは、皮肉なことである。

①ルカ 9 : 54

Luk 9:54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」

②今ヨハネは、サマリヤ人を兄弟として受け入れようとしている。

③使徒の働きの中で、ヨハネの名前が出て来るのはこれが最後である。

2. 15～16節

Act 8:15 ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。

Act 8:16 彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けてただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。

(1) 「ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った」

①ペンテコステの日のような聖霊の傾注がまだ起こっていなかった。

(2) 「彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けてただけで、」

①マタ 28 : 19

Mat 28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、

- ②「父、子、聖霊の御名によって」と「主イエスの御名によって」は同じ意味。
- ③ルカは、洗礼の式文を紹介しているのではなく、実質を表現している。
- ③英語では、「baptized into the name of the Lord Jesus.」(ASV)である。
- ④洗礼は、三位一体の神との一体化、主イエスとの一体化である。

(3)「聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである」

- ①聖霊の種々の働きは、信じるということと同時に起こる。
 - *聖霊によるバプテスマ
 - *聖霊の内住
 - *聖霊の証印
- ②ここでは、信じるということと聖霊の働きが起こることの間に、時間差がある。
 - *これは、極めて変則的な事例である(アノマリー)。
- ③時間差がある理由は、これがサマリア人の救いに関する出来事だからである。
 - *ユダヤ人とサマリア人の間にはバウンダリーがあった。

3. 17 節

Act 8:17 ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

- (1) ペテロとヨハネの按手により、サマリア人たちは聖霊を受けた。
 - ①ルカは、どういう現象が起こったのかを明確に記していない。
 - ②ペンテコステの日が起こったのと同じようなことが起こったと推測される。
 - *サマリア人たちは、異言で祈ったのであろう。
 - *魔術師シモンの反応は、そのことを示している。
 - ③神は、サマリア人の救いを保証された。
 - ④ピリポの働きの正当性が証明された。

IV. 魔術師シモンの罪(18~25 節)

1. 18~19 節

Act 8:18 使徒たちが手を置くと御霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、

Act 8:19 「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい」と言った。

- (1) シモンは、未だに魔術師の発想で行動している。
 - ①彼は、ペテロとヨハネが発揮した超自然の力に感銘を受けた。
 - ②自分もその力を得たいと願った。

- ③「大能と呼ばれる、神の力」というタイトルの回復を願った。
- ④彼には、聖霊によるバプテスマの意味を理解する霊的洞察力がなかった。

(2) 魔術的力は、金で売買できる。

- ①シモンは、金で聖霊を付与する力を買おうとした。
- ②英語の「simony」という言葉は、ここから出た。

＊聖職の売買

＊聖なるもので利得を得る。

2. 20～21 節

Act 8:20 ペテロは彼に向かって言った。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。」

Act 8:21 あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。

(1) ペテロの厳しい言葉は、シモンが救われていないことを示している。

- ①「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい」

＊もし彼が信者なら、滅びることはないはずである（ヨハ3:16）。

- ②「あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません」

＊もし彼が信者なら、信者の交わりの中にいたはずである。

- ③「あなたの心が神の前に正しくないからです」

＊これは、救われていない人の心の状態を描写したものである。

3. 22～23 節

Act 8:22 だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。

Act 8:23 あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」

(1) ペテロはシモンに、真の悔い改めと主イエスへの信頼を勧めた。

- ①「あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません」

- ②シモンの罪の重さを考えると、ペテロは赦しの確信を持てなかったのであろう。

(2)「あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいる」

- ①これもまた、救われていない人の描写である。

4. 24 節

Act 8:24 シモンは答えて言った。「あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください。」

(1) シモンの言葉は、真の悔い改めからはほど遠いものである。

- ①彼は、イエス・キリストにではなく、人間に依存している。
- ②彼は、罪を悲しむのではなく、罪の結果だけを恐れている。
- ③彼には、新生した信者が持っている霊性がない。
- ④これ以降、シモンの名は聖書から消える。

＊教会の伝承の中にその名が出て来る（グノーシス主義の創始者）。

5. 25 節

Act 8:25 このようにして、使徒たちはおごそかにあかしをし、また主のことばを語って後、エルサレムへの帰途につき、サマリヤ人の多くの村でも福音を宣べ伝えた。

(1) サマリヤの町に拠点としての教会が誕生した。

- ①これが、宣教の広がりを可能にした。
- ②エルサレムへの帰路、「サマリヤ人の多くの村」でも福音を宣べ伝えた。
- ③彼らは、サマリヤ人も救いに招かれているという確信を持った。
- ④ユダヤ人の使徒たちが、サマリヤ人伝道をするのは、驚くべきことである。

(2) 時代は、かつての時代から、「種を蒔く人」のたとえが示す時代となった

①マタ 10：5～6

Mat 10:5 イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってははいけません。サマリヤ人の町に入ってははいけません。」

Mat 10:6 イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。

②ルカ 9：53～56

Luk 9:53 しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。

Luk 9:54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」

Luk 9:55 しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。

Luk 9:56 そして一行は別の村に行った。

結論

1. ペンテコステの日の出来事とサマリヤの町での出来事の対比

(1) ペンテコステの日のユダヤ人たちの救い（使2：38）

Act 2:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

- ①悔い改めた。
- ②洗礼を受けた。
- ③聖霊を受けた。

(2) サマリヤ人たちの救い

- ①信じた。
- ②洗礼を受けた。
- ③使徒たちが手を置いて祈った。
- ④聖霊を受けた。

(3) 時差がある理由

- ①両者ともに、恵みにより、信仰によって救われている。
- ②教会の一致を保つため。キリストの教会はひとつである。
- ③ユダヤ人たちは、サマリヤ人に優越感を持つ傾向があった。
- ④サマリヤ人たちは、ユダヤ人から離れて独自の教会を建てる可能性があった。

2. ペテロの役割

(1) マタ 16：19

Mat 16:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

- ①ペテロは、救いが諸民族に広がるための器として用いられた。
- ②ペテロには、「天の御国のかぎ（複数形）」が与えられた。
*教会の一員となるための門を開くかぎである。

(2) 天の御国のかぎの行使

- ①使2章で、ペテロはユダヤ人のために天の御国への門を開いた。
- ②使8章で、サマリヤ人のために天の御国の門を開いた。
- ③使10章で、異邦人のために天の御国の門を開いた。

(3) ヨハネもペテロも、自らの使命を果たした。

「エチオピア人の宦官の救い」

使徒8：26～40

1. はじめに

- (1) 伝道者ピリポの奉仕は、バウンダリーを越える奉仕であった。
 - ①大きなバウンダリーは、サマリヤ人との間にあったものである。
 - ②小さなバウンダリーは、エチオピア人の改宗者との間にあったものである。
- (2) 福音は、ユダヤ人、サマリヤ人、異邦人へと伝わっていく。
 - ①伝道の主体は、復活のイエスである。
 - ②主イエスは、さまざまな方法と人をお用いになる。

2. アウトライン

- (1) 天使による導き（26～28 節）
- (2) 聖霊による導き（29～31 節）
- (3) みことばによる導き（32～35 節）
- (4) 見えない御手による導き（36～40 節）

結論

- (1) ユダヤ人によるイザヤ書 53 章の解釈
- (2) エチオピア人の宦官の救いの意味

エチオピア人の救いについて学ぶ。

I. 天使による導き（26～28 節）

1. 26～27a 節

Act 8:26 ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」（このガザは今、荒れ果てている。）

Act 8:27a そこで、彼は立って出かけた。

- (1) サマリヤ人伝道に関しては、神からの命令はなかった。
 - ①ピリポが自主的にサマリヤ人に向ってキリストを伝えた。
 - ②ここでは、天使がピリポに命じている（復活のキリストの命令である）。
 - ③本来なら、使徒たちと行動をともし、サマリヤの村々で伝道したはずである。
 - ④しかし天使は、ピリポに方向転換を命じた。

*実り多い宣教地から、荒野への移動である。

*エルサレムからガザに下る道に出る（約 80 キロの道）。

*ペリシテ人の古代都市ガザは、前93年に破壊され、前57年に再建された。

*この道路は、ガザの遺跡を通過し、新ガザに至る荒野の道である。

⑤ピリポは、その命令に従順に従った。

2. 27b～28節

Act 8:27b **すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、**

Act 8:28 **いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。**

(1) ピリポは、同じ方角に向って旅をするエチオピア人の高官を見つけた。

①これはキャラバン隊であり、その真ん中を彼が乗る馬車が動いている。

②エチオピアでは、王は余りにも神聖な存在なので、統治は女王に委ねられた。

*王は、太陽神の息子である。

③カンダケとは、王母のタイトルである（エジプトのパロと同じ）。

④彼は、女王の財産全部を管理していた。

⑤これは、現代のエチオピアではない。

⑥聖書時代のエチオピアは、エジプトの南部とスーダンを含む地域（ヌビア）。

(2) この高官は、宦官であった。

①申23:1は、宦官が【主】の集会に加わることを禁じている。

Deu 23:1 **こうがんのつぶれた者、陰茎を切り取られた者は、【主】の集会に加わってはならない。**

②イザ56:3～5は、千年王国で宦官に与えられる祝福を預言している。

Isa 56:3 **【主】に連なる外国人は言ってはならない。／「【主】はきっと、私をその民から切り離される」と。／宦官も言ってはならない。／「ああ、私は枯れ木だ」と。**

Isa 56:4 **まことに【主】はこう仰せられる。／「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶ事を選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、**

Isa 56:5 **わたしの家、わたしの城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。**

(3) ユダヤ教への改宗者

①神を恐れる（敬う）異邦人

*ユダヤ教の神を礼拝する異邦人

②門の改宗者（proselyte of the gate）

*ユダヤ教のある戒律を実行する異邦人（割礼を除く）

③改宗者

＊全面的にユダヤ教に改宗した異邦人

(5) ルカは、この高官がどのレベルの改宗者であるかは述べていない。

①恐らく、②か③であろう。

②彼は、最初に救われた異邦人ではない。使徒の働きの流れと矛盾する。

③また、最初に救われた改宗者でもない。

Act 6:5 この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、

④ペテロのペンテコステメッセージを改宗者たちが聞いていた（使 2：10～11）。

⑤彼は、礼拝のためにエルサレムに上り、いま帰る途中であった。

＊3つの巡礼祭があるが、恐らく、過越の祭りであろう。

(5) 彼は、馬車に乗ってイザヤ書の巻物を読んでいた。

①馬車に乗ってただけで、金持ちであることが分かる。馬車には御者がいた。

②この巻物は、エルサレムに上った記念に買ったのであろう。

③彼が声に出して読んでいたのは、ギリシア語訳のイザヤ書であった。

II. 聖霊による導き（29～31節）

1. 29～30節

Act 8:29 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」と言われた。

Act 8:30 そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか」と言った。

(1) ここでは、聖霊からの語りかけがあった。

①聖霊は、人格である。「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」

(2) ピリポは、その語りかけに直ちに従った。

①走り寄った。

②ギリシア語に翻訳されたイザヤ書 53 章を大声で読んでいるのが聞こえた。

③「あなたは、読んでいることが、わかりますか」

＊分かる。「ギノウスコウ」

＊読む。「アナギノウスコウ」

2. 31節

Act 8:31 すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と言った。そして、馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。

(1) これこそ真の求道者の言葉である。

- ①自分が助けを必要としていることを認めている。
- ②人種的偏見は一切ない。
- ③謙遜になって助けを求めている。

Ⅲ. みことばによる導き (32～35 節)

1. 32～33 節

Act 8:32 彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。／「ほふり場に連れて行かれる羊のように、／また、黙々として／毛を刈る者の前に立つ小羊のように、／彼は口を開かなかった。

Act 8:33 彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。／彼の時代のことを、だれが話すことができようか。／彼のいのちは地上から取り去られたのである。」

(1) イザヤ書 53：7～8

- ①受難のしもべの箇所（イザ 52：13～53：12）
- ②この高官は、旧約聖書の中で最も明白なメシア預言を読んでいた。

2. 34 節

Act 8:34 宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」

(1) 宦官の質問は、非常に重要なものである。

- ①この預言が、ある人物に関するものであることを理解していた。
- ②その人物とは、イザヤなのか、だれかほかの人か。

3. 35 節

Act 8:35 ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。

(1) ピリポは、旧約聖書を用いて個人伝道を行った。

- ①イザヤは、メシアについて預言している。
- ②イザヤが預言した受難のしもべは、イエスである。
- ③過越の祭りを祝った直後の彼にとっては、有意義なメッセージであった。

Ⅳ. 見えない御手の導き (36～40 節)

1. 36 節

Act 8:36 道を進んで行くうちに、水のある所に來たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」

(1) これは、神の摂理による導きである。

- ① 荒野の道を進んでいくうちに、水のある所に來た。
- ② これは荒野に流れるワジである。
- ③ ワジに水が流れるのは、過越の祭りの季節である。

(2) 「私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか」

① 彼は、ユダヤ教に改宗した際に、ミクヴェで洗礼を受けた。

＊水から上がった瞬間、新しいアイデンティティを得た。

＊彼はもはや異邦人ではなく、ユダヤ人と見なされた。

② 今彼は、イスラエルのメシアを信じた証しとして洗礼を受けようとしている。

＊ミクヴェでなく、荒野のワジで。

(3) 37 節は、後代の付加である。

Act 8:37 「これに対して、ピリポは、「あなたがまごころから信じるなら、受けてさしつかえはありません」と言った。すると、彼は「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます」と答えた。」（口語訳）

2. 38～39 節

Act 8:38 そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。

Act 8:39 水から上がって來たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。

(1) この洗礼は、浸礼である。

① ユダヤ教の洗礼は、浸礼しかない。

(2) 聖霊がピリポを連れ去ったで、彼は奇跡的にその姿を消した。

① ハルバゾウという動詞。

② 携挙を示す動詞。

1Th 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

③ ハルバゾウ→ラプツロ（ラテン語）→ラップチャア

④ 宦官は、喜びながら帰って行った。

3. 40 節

Act 8:40 それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

- (1) 聖霊は、ピリポをさらに 30 キロ北に運んだ。
 - ①旧約時代、アゾトはアシュドデと呼ばれた。
- (2) それからピリポは、さらに 80 キロ歩いてカイザリヤに行った。
 - ①途中の町々で、福音を宣べ伝えた。
 - ②カイザリヤが彼の居住地となった。

結論

1. ユダヤ人によるイザヤ書 53 章の解釈

- (1) 古代のラビたちは、イザ 53 章はメシア預言であるとの意見で一致していた。
- (2) 初期の教会の見解も、これを同じであった。
- (3) 11 世紀の有名なラビであるラシが新説を紹介した。
 - ①イザ 53 章の受難のしもべとは、イスラエル民族である。
 - ②恐らく、クリスチャンがこの預言を伝道に使うことに反発したのであろう。
 - ③現代のユダヤ教では、イザ 52～54 章は会堂での朗読箇所から除外されている。
- (4) 現代のラビたちの多数意見は、イスラエル民族説である。
- (5) しかし、メシア説を支持する少数のラビたちもいる。
- (6) イエスは、この預言を自分に適用された。

Luk 22:37 あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」

- (7) イザヤ書 53 章は、ユダヤ人伝道の最強の武器である。

2. エチオピア人の宦官の救いの意味

- (1) エチオピア人の宦官の救いは、サマリヤ人の救いとサウロの回心の間に来る。
- (2) これは、サマリヤ人と異邦人との間のバウンダリーの深さを示している。
- (3) 当時ユダヤ人たちは、エチオピアは南の方にある地の果てだと考えられていた。
 - ①ローマは、西の方にある地の果てだと考えられていた。
- (4) エチオピア人の救いは、異邦人の救いと地の果てまで届く伝道を予感させるものである。

終わりに：きょうからハーベストフォーラム東京は 12 年目に入る。

「ダマスコ途上での出来事」

使徒9：1～9

1. はじめに

(1) 使9章は、ダマスコ途上で起こった出来事の記録である。

①これは、サウロの人生の方向性を変えた出来事である。

②これは、使徒の働きの中で決定的に重要な出来事である(3度出てくる)。

＊使9：1～9（最初の記録）

＊使21：27～40（暴徒たちに対するパウロの弁明）

＊使26：1～23（アグリッパ2世に対するパウロの弁明）

③省略があったり、強調点が異なったりするが（文学形式）、枠組みは同じ。

(2) 神の計画は、異邦人の救いに向って確実に進展している。

①ステパノの奉仕（彼は、福音の普遍性を説いた）

②ピリポの奉仕（サマリヤ人伝道、エチオピアの宦官への伝道）

③ペテロの奉仕（カイザリヤでの異邦人伝道）

④サウロ（パウロ）は、ペテロが開始した異邦人伝道の継承者である。

2. アウトライン

(1) 怒りに燃えるサウロ（1～2節）

(2) 地に倒れるサウロ（3～7節）

(3) 盲目になるサウロ（8～9節）

結論：教会の本質

ダマスコ途上での出来事について学ぶ。

I. 怒りに燃えるサウロ（1～2節）

1. サウロという人物（異邦人の使徒となるために用意された器である）

(1) 使徒の働きの中では、ペテロとサウロが双璧である。

①ともに強烈な個性を有し、弱点も持っていた。

②ともにイエス・キリストの使徒として任命を受けた。

③ともに聖霊によって建て上げられ、用いられた。

④身体的特徴は分らない。

＊伝承では、「背が低く、がにまたで、頭ははげていた」とされている。

(2) 家族の歴史

①彼が誕生する以前に、祖父か父がタルソに移住した。

＊タルソは、ローマの属州キリキヤ州の首都である。

②彼の祖父か父の時代に、ローマの市民権を獲得したと思われる。

＊彼の一家は、タルソの町の上流階級に属していたことが分かる。

③当時、市民権を得る方法は、3 つあった。

＊国か地方の公職に一定期間就く。

＊市民権を金で買う（パウロの一家の場合、この可能性が大である）。

＊奴隷が、市民権を持つ主人から解放され市民となる。

④サウロは、生まれながらのローマ市民であった。

＊この特権は、伝道のために役立った。

(3) 名前

①ヘブル名はサウロ（Saul）。

＊家族の誇り高い様子が読み取れる。

＊ベニヤミン族から出た初代のイスラエルの王サウルと同じ名前である。

②ローマ名（ラテン名）はパウロ（Paulus）である。

(4) 言語

①子どもの頃は、ギリシア語で育ったのであろう。

②家庭では、ヘブル語かアラム語を話したと思われる。

③教育を受ける過程で、ラテン語も学んだであろう。

(5) 教育

①父親は、パリサイ人か、その派と親密な関係にあったかのいずれかであろう。

②パリサイ人になるための訓練

＊5 歳で、ヘブル語聖書について正式な教育を受け始める。

＊10 歳で、ラビ的ユダヤ教や口伝律法について学び始める。

＊彼がガマリエルから学ぶためにエルサレムに上ったのは、この頃であろう。

＊エルサレムには、サウロの姉妹が住んでいた（使 23 : 16）。

＊13 歳で、バール・ミツバを迎えた。

＊エルサレムでは、職業訓練も受けた（天幕職人）。

2. 1 節

Act 9:1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司の

ところに行き、

(1) 「なおも」は、この箇所と使 8 : 3~4 を結んでいる。

Act 8:3 サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。

Act 8:4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

①サウロは、イエスの弟子たちを脅かし、殺害することに情熱を燃やした。

(2) 旧約聖書の中にある先例

①民 25 : 1~5

*モーセは、バアル・ペオルを慕った者たちの殺害を命じた。

*モアブの女たちの誘惑に負け、偶像礼拝と性的罪を犯した。

*この神罰で、2万4000人が死んだ。

②1列 18 : 40

*エリヤは、バアルの預言者450人を殺すように命じた。

(3) サウロは、迫害の地理的範囲を広げるために、大祭司のところに言った。

①大祭司は、カヤパである。

②地理的範囲は、ユダヤを越えてダマスコまで及ぶ。

3. 2節

Act 9:2 **ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。**

(1) ダマスコは、人が住み続けている町としては、世界最古の町である。

①旧約時代、ダマスコ（アラム）はイスラエルの敵となったり友となったりした。

②ダマスコには大きなユダヤ人共同体があり（数万人）、会堂も多く存在していた。

③逃亡者たちがその町に根を下ろせば、そこを拠点に悪影響が広がる恐れがある。

④それゆえ、男女を問わず、見つけ次第縛り上げる必要がある。

*エルサレムに連れ戻り、裁判を受けさせる。

(2) 「この道の者」 (the Way)

①当時（教会が誕生して約5年後）は、まだクリスチャンという名称がなかった。

②詩 1 : 6 には「正しい者の道」 (the way of the righteous) という言葉がある。

③イザ 40 : 3 とルカ 3 : 4 には「主の道」 (the way of the Lord) がある。

④エッセネ派も、自分たちのことを「この道の者」 (the Way) と呼んでいた。

(3) 「諸会堂あての手紙」

- ①中間時代、ローマとユダヤの間に条約が締結された。
- ②大祭司は、ローマ帝国内のユダヤ人共同体の上に権威を振うことが認められた。
- ③その中には、ユダヤから逃亡した者を連れ戻す権威も含まれていた。
- ④大祭司からダマスコの諸会堂にあてられた手紙の内容
 - *サウロは大祭司の代理人である。
 - *彼は、「この道の者」を逮捕し、エルサレムに連れ戻そうとしている。
 - *各会堂は、サウロのミッションが成功するよう協力して欲しい。
- ⑤パリサイ派とサドカイ派が協力することは、珍しい。

Ⅱ. 地に倒れるサウロ（3～7 節）

1. 3～4 節

Act 9:3 ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。

Act 9:4 彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。

(1) エルサレムからダマスコまでは、約 240 キロの道のりである。

- ①馬に乗れば約 6 日かかる。
- ②5 日目か 6 日目に、サウロとその一行はダマスコの近くまで来た。

(2) そのとき、超自然的な出来事が起こった。

①「突然、天からの光が彼を巡り照らした」

- *後にパウロは、「太陽よりも明るい光」と言っている（使 26 : 13）。
- *これは、シャカイナグローリーである。
- *目が見えなくなるほどの強烈な光である。
- *このときサウロは、復活のイエスを見た。
- *サウロは、地に倒れた。落馬したのであろう。

②「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。

- *これまでは、ギリシア語の「Saulos」。
- *ここは、ヘブル語の「Saoul」。
- *それをギリシア語表記すると「Shaul」。ギリシア語には「sh」の音がない。
- *2 度名前を呼ぶのは、本人の関心を引き起こすためである。
- *「なぜわたしを迫害するのか」というのは、神からの叱責である。
- *神に熱心に仕えていると考えていたパウロにとっては衝撃である。
- *これは、バット・コルと呼ばれるものである。

2. 5～6節

Act 9:5 彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

Act 9:6 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」

(1) 「主よ。あなたはどなたですか」

- ①パウロは、声の主が誰であるかを正確には知らなかった。
- ②天使か、天的存在か。

(2) 「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」

- ①教会を迫害することは、イエスを迫害することである。
- ②立ち上がって、町に入れば、次にすべきことが告げられる。

3. 7節

Act 9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。

(1) 同行していた人たちは、光を見たし、声も聞いた。

- ①しかし、復活のイエスは見なかった。
- ②また、声が伝えている意味も理解しなかった。

Ⅲ. 盲目になるサウロ（8～9節）

1. 8節

Act 9:8 サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。

(1) サウロは地面から立ち上がった。

- ①馬は逃げていたが、同行者たちはものも言えず立っていた。
- ②サウロの目は、見えなくなっていた。

(2) 彼は、人々に手を引かれてダマスコに向った。

- ①誇り高きパリサイ人が、哀れな姿になった。
- ②イエスのしもべにとっては、必要な体験であった。

2. 9節

Act 9:9 彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。

(1) 彼は、自発的に3日間の断食を行った（水も飲まなかった）。

①これは、主を待ち望むための時間である。

②肉の力によって築き上げてきたものが破壊された。

③彼は、何が起こったのかを真剣に考えた。

④神の働きは、砕かれた魂とともに始まる。

⑤彼は改宗したのではなく、回心したのである。

結論：教会の本質

(1) 「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」（使9：5b）

(2) イエスと教会は有機的に結びついている。

(3) ルカの基本的な教会理解である。

①ルカ10：16

Luk 10:16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。」

②使1：1～2

Act 1:1 テオピロよ。私は前の書で、イエスが行い始め、教え始められたすべてのことについて書き、

Act 1:2 お選びになった使徒たちに聖霊によって命じてから、天に上げられた日のことにまで及びました。

(4) パウロの神学

①ロマ12：4～5

Rom 12:4 一つのからだには多くの器官があつて、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、

Rom 12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

②1コリ12：12～27

③エペ1：22～23

Eph 1:22 また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

Eph 1:23 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

④エペ1：23（口語訳）

Eph 1:23 この教会はキリストのからだであつて、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。

⑤コロ1：18～24